

はじめての東京

夕暮れの日活ビル

中嶋 嶺雄

信州・松本の街中に生まれ育った私は、高校一年の秋まで、恵まれた家庭の一人っ子として、好きなことを思う存分にやらせてもらっていた。

終戦直後の昭和二十一年、鈴木鎮一先生らが創立した松本音楽院では小学校時代からヴァイオリンを習わせてもらったし、父が俳句をやっていたこともあって、わが家に出入りする著名な俳人・歌人や画家達に接する機会も多かった。絵を習っていた一水会の古市幸利先生の御紹介で、日本洋画界の重鎮・石井柏亭先生に中信展初入選の作品を誉めていただいたのは、たしか中学一年生の秋だった。牧水未亡人の歌人・若山喜志子先生に可愛がっていただいたのもその頃だった。中学生時代は、ヴァイオリンで県のコンクールに入賞、絵の方は県展に毎年入選し、また陸

上競技でも長野県の新記録をつくったり、得意絶頂の少年時代であった。

ところが、高校一年の秋、手広く菓局を経営していた父が事業に失敗して、わが家は一切の財産を失うこととなった。ショックで父は病床に伏してしまい、当時十六歳の私は、なんとか打開策はないものかと、東京の製菓会社に向けあうために、松本から八王子郊外・恩方村の製菓会社役員宅を単身訪ねたのであった。そのときの夕焼けの茜色が空をも焦がすほどであったことが忘れられない。

だが、そんなことでわが家を救うすべはなかったのであり、昭和二十七年十一月三日の文化の日、親子三人は、大きな町屋に土蔵が二つもあつたわが家を人手に渡し、店員たちとも別れ、深夜に裏木戸から傷心のうちにそつと立ち去つたのである。そのような逆境のなかで、私は一時、高校も休学せざるを得なかったが、密かに想うひとがあつたこともあつて、東京に出て都会の風景を画

いてみたいという衝動に強く駆りたてられていた。そして高校三年の夏休み、皆が受験の準備にいそんでいる頃、私はイーゼルをかついで上京し、日比谷公園へ行って小音楽堂の辺りから有楽町方面を写生した。周囲に人垣が出来て気はずかしかったが、その頃、ブラックの静物画やユトリロの風景画に凝っていた私は、生意気にも、その両者をミックスしたようなタッチで一枚の都会風景を仕上げたのである。

日比谷公園が暮れなすむ頃、日比谷の交差点まで来ると、そこに巨大な新しいビルが聳立していた。日活国際会館ビル、現在の日比谷パークビルである。たしか九階建てであつたが、ビルディングとはこんなに高いものかと下から上を見上げ、同時に、これが東京なのだ、と感嘆したのが、だから私にとっての実際には初めての東京である。

このときの絵に「都心の憂鬱」という題をつけて信州の水彩画展に出

品したところ、著名な水彩画伯・白山卓吉先生のお誉めにあずかって「奨励賞」の金一封をいただいた。

やがて私は現代中国や国際関係を研究する道へ転身し、大学院に入つて間もない頃、初めてジャーナリズムに執筆した論文「中ソ論争の新局面と中国」が雑誌『エコノミスト』（一九六三年四月九日号）に大きく掲載された。有楽町駅前にあつた毎日新聞社で掲載誌を発売前に受けた私は、足取りも軽く、おのずと日活ビルの方へ向つて歩いていった。このときも、ビルの谷間の東京の夕景が美しかったことを、つい先日のことのように思い出す。

(なかじま・みねお 東京外語大教授)

上野駅

司 修

前橋に住んでいて、わざわざ東京へ墓参りに行くのは不思議なことだつた。友人の墓参りは、町から田舎

# 季刊 東京人

創刊 第4号 1986 秋

レオナルド教授の皇居周辺改造計画 L・ベネーヴォロ

特集・よみがえれ、劇場空間 山口昌男 服部幸雄 榎本滋民

後樂園球場物語 鈴木 明

路上から見たもう一つの東京〈港区編〉

路上観察学会 赤瀬川原平 藤森照信 南 伸坊ほか

■創作

夜の犬 池澤夏樹



■グラフィア 東京の造型空間

美的礼節 アートを指向した建築 松葉一清 撮影村井修 3

■巻頭エッセイ

はじめての東京 中嶋嶺雄 司修 川西蘭 久保貞次郎 16

私のなかの東京 古井由吉 小島慶三 犬養智子 安西篤子 19

〈読者投稿〉 上田由香利 瀬古修治 峰岸宏臣 川島康之 22

レオナルド教授の皇居周辺改造計画 レオナルド・ベネーヴォロ 24

対談 フイレんツェと東京の間で 塩野七生×清水徹 32

### 特集 よみがえれ、劇場空間

■座談会

幕間の愉しさあつての劇場なのに… 48

山口昌男 太田省吾 司会三浦雅士

芝居小屋が艶やかであつたころ 服部幸雄 58

消えた劇場の戦後史 森 秀男 62

対談 芝居には都市が映つてみえる 小林信彦×榎本滋民 66

劇場都市・東京を支える小劇場 扇田昭彦 76

小劇場と町空間 須永市蔵 80

下町に演劇の灯を ベニサン・ピット(新大橋)

銀フラでふらりと能を 銀座能楽堂(銀座)

公園通りに夢の拠点を ジアン・ジアン(渋谷)

■東京のありふれた町

赤提灯の似合うオフ・ブロードウェイ・下北沢 川本三郎 86